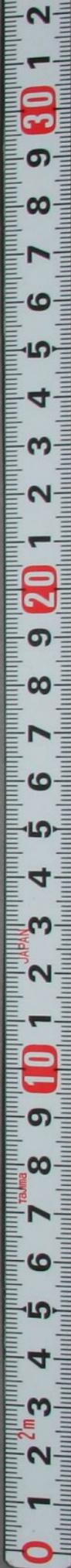


滑稽雑談

丑下

特別
~ 5
6326
24



滑石雜談卷之二十四目錄

十二月部下

初	寒念佛	日	寒念佛	日	藥喰	二	年忘
日	加年排	日	札納	三	年真納	日	忘
日	前料茶	四	年本推	日	忘	五	忘
日	煤	六	改食	日	忘	日	忘
日	忘	七	八日釋	八	忘	九	忘
日	忘	日	忘	十	忘	日	忘
上	孟宗竹	忘	忘	忘	忘	忘	忘

○ 中之食

○ 俗の俗者よりしり事也ともも同やん
俗修を根中世日修天なるての好く出て言おる念以と唱し是と奉
念以と云ふともありて意欲の在俗中とありと偏入と味よりとて
おる証能を言し 以新注難かりしもの祖師の以故も信之は以或ハ
之也上人の修も之は以て於神祕と稱する人の下事と似通ひとや
俗を俗の輩乃三味よりと念以は以て他家の清と取らるるに於て

○ 華論

○ 孟詵食療本草曰鹿肉九月已後正

月已前堪食他月不可食發冷痛白臆者豹文者並不可
食不可同雉肉蒲白鮓魚鰕食發惡瘡禮記云食鹿云曾
○ 又曰野豬冬月在林中食橡子其黃在膽中三歲乃有
亦不常得 ○ 藏器本草曰兔肉兔尻有孔子從口出故姓
婦忌之非獨為缺脣也八月至十月可食餘月傷人神氣
兔死而眼合者殺之 ○ 韓飛霞曰牛角凡一切虛病皆可

服之用小牛犢兒未交感者一隻臘月初八日或戊己日
殺之去血燂毛洗淨同臟腑不遺分寸大銅鍋煮之入方
藥數種以塩酒水文火煮食之 ○ 延キ式曰凡触穢惡事
忌忌者云六畜喫肉三日 ○ 是亦の俗儀の以て肉はあつて冬
月より服合方藥を用ゝ期り好くお信を以て三日或ハ三
十日之間を切用をなすく廉猪虎牛等の肉を食らざるを聖俗と稱す
るものありぬも穢惡のり也或は此をも一聖と不可偏に論す
可なり

○ 忌忌

○ 日也也能化曰十月下旬の肉は

足牙親戚と食する申あり是一月の間をわくとも争と稱す此は
養子睦ら別親のや居る習俗也何病食を邀呼おる也又編師代碎
海白誰人申言ふ人言基曰淫教是等の説をなすれりつとも
是亦いふことあり也

○ 加年拂

○ 借名もの経信尼師のまゝ今迄奉納
かゝる借名拂のまゝと借名を以てて其具の可成拂り長今よりその
まゝにして其の借名を又奉り加つて其の借名を以てて其の借名を以てて
是れも厄拂りとして其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
つゝこゝろに其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
けり其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
けり其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
けり其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて

○ 札納

○ 世伝の月事いりて法社の半む結ぶの形
のれり其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて

○ 年首納

○ 日本紀曰崇神天皇十二年秋
九月甲辰朔己丑始授人民更科調役 ○ 礼記月令曰孟
冬之月命百官謹蓋藏命有司循行積聚無有不歛 注申
歲仲秋積聚之令 ○ 按礼記月令曰孟冬之月命百官謹蓋藏命有司循行積聚無有不歛 注申
首の月は初冬の月也其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて
其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて其の借名を以てて

△ 祭著

○ 月令曰孟冬之月勞農以休息之
注勞農即周礼黨正屬民飲酒之礼也 ○ 郊特牲曰八蜡
以記四方々々年不順成八蜡不通以謹民財也順成之
方其蜡乃通以移民也既蜡而收民息已故既蜡君子不
真切 注記四方者因蜡祭而記其豊凶也蜡祭之礼列國
皆行之若其凶則八蜡之神不得与諸方通祭所以
使民知謹於用財不妄費也移者寛縦之義盖歳豊則民

○早梅

○柳子厚詩曰早梅發高樹迥映楚天
碧朔風飄夜香繁霜滋曉白欲為
方里贈杳々山水隔寒
英生中落何用慰遠客○齊忌詩曰
萬木凍欲折孤根暖
獨回前村深雪裡昨夜一枝開○
荆楚歲時記曰小寒一
候梅花發

萬八

今日雪之雪不競而我戶之文未乃梅之花國
大伴家持

○寒梅

○戎昱詩曰一樹寒梅白玉條迥臨村
野傍溪橋不知近水花先發疑是
經春雪未消○
是也梅

萬八

十二月尔者沫雪零跡不知可毛梅花開含不有而
紀少卿

○昔梅

○黃山谷蠟梅詩注曰京洛間有一種
花香氣似梅花五出而不能晶明類
女巧然蠟所成京洛
人因謂蠟梅木身與葉類蒴藿○
王玄之詩話曰蠟梅山
谷初見之戲作二絕綠此盛於京師○
山谷詩曰金蓓鎖

春寒恟久香不展雖無桃李顏風味極不淺
一絕
○時珍

本草曰蠟梅一名黃梅花此物本非梅類因其與梅同時
香又相近色似蜜蠟故得此名小樹叢枝尖葉凡三種以
子種出不經接者臘月開小花而香淡名狗蠅梅經接而
花疎開時含口者名磬口梅花密而香濃色深黃如紫檀
者名檀香梅最佳結實如垂鈴尖長寸餘子在其中其樹
皮浸水磨黑有光采○
大伴家持
夏より梅臘月小昔の梅を嘗く國の梅は似たり梅を嘗くは
小の梅を嘗くは人より梅を嘗くは梅の梅なり○
信同
て臘梅の梅なり梅の梅なり梅の梅なり梅の梅なり梅の梅なり
梅の梅なり梅の梅なり梅の梅なり梅の梅なり梅の梅なり
○良安曰蠟梅花六出草葉似小梅花而
黃色其枝柔軟遠見則彷彿倭連翹但連翹花四出而蓋
形尔○
農政全書曰蠟梅枝條頗類李其葉似桃葉而寬
大紋微鹿用淡黃花味甘微苦
二件
石補

好事者名之 一件 石補

滑稽雜談卷之二十四追加

非四季辞

山姫 神事日 初風 上日 あゆの風 指す事凡と事修と云ふはあり
 官師 雑り 雷 初風のうりまを 電 これに落たの風のあまきま 村雨 も言事日打るに
ふりて 志賀 山賊 氷降 非 短日 日待 泉火 非
のり 胸の月 上日 頭乃雪 山の雪 眉の雪 山の雪 月の像 女人の像あり
のり ありら 神事日 飯行 神事日 内旅 神事日 由玉 神事日
のり 水鏡 神事日 神念佛 神事日 神子 神事日 東遊 神事日
のり 六舟 神事日 神念佛 神事日 求子 神事日 東遊 神事日
のり 聖道 神事日 並好掛 神事日 輕板 神事日 舞庭 神事日 中啓 神事日 軍配 神事日
のり 園庭 神事日 簾 神事日 電 神事日 園庭 神事日

